

# デザインは未来を照らす

## 希望の光

川添 光代

株式会社久宝金属製作所  
大阪デザインセンター 評議員

私の会社は小さな町工場です。父が復員してから立ち上げた会社なので、もう70年以上続いていることになります。一番の特徴は「下請けをしたことがない」ということでしょう。父の創業の時代からずっと自ら発案し、設計し、自社で製品を作る町工場でありました。父が亡くなり、その後母が継いでいましたが、ちょうど10年経った頃その母も急逝し、私が継ぐことになったのです。その当時、社員はみんな私より年上で、大きな売り上げの取引先をライバル会社に取りられたばかり。しかも地上げにかかっているという問題山積の状態でした。それらの問題を一つ一つ解決していきました。けれど、一番大きな問題が残っていました。社員も私も、新製品を作ることができなかったのです。なので、会社の未来像を描くことができませんでした。未来に何の希望も見えてきません。このままではいつか社がなくなってしまうのではないかという恐怖感でいっぱいでした。泥沼でもかいているかのような日々が続きました。泥沼、しかも真っ暗闇です。

そんな時、大阪デザインセンターから一枚のファックスが届きました。「喜多俊之先生のデザインセミナー」の案内でした。三日連続のセミナーです。なぜか、ピンときて申し込みをしました。熱のこもったセミナーでした。そして私は、デザインが会社を新しく作り変え、新しい時代を作っていくことを知りました。真っ暗闇の中にいると感じて苦しんでいた私は光が見えたと感じ、その三日間ずっと泣き通しでした。その光はとても小さかったけれど、希望の光でした。そして、その光の向こうに未来が見えました。私はすぐさま喜多先生に助力をお願いし、先生は私たちのようなところにも力を貸してくださり、顧問をしてくださいました。そうです、私にとって「デザインは希望の光」となりました。

その後、私達は、大阪デザインセンターで、社員を伴ってたくさんのお話を学んできました。いろいろなデザイナーの先生方に顧問もしていただきました。おかげで、私たちは2度のグッドデザイン賞や、JIDデザインアワード、Forbs Small Giantsなど、いろいろな賞を受けられるような企業になることができました。「デザイン」を学んだおかげで私たちの今があり、今、私たちは、未来を見据えています。やはり、「デザインは希望の光」でありました。全て、大阪デザインセンターのおかげです。それをたくさんの人に伝えたいといつも思っています。

今、私たちは世界的にコロナに直面し、あらゆる価値観、生き方、仕事を見直さなければならなくなっています。けれど、本当はコロナ以前から、日本を含む先進国と言われる国々は徐々に縮んで行っているのをみんな感じていたと思います。なんと言っても人口減少の影響は大きいですね。だから、コロナがなくても私たちはパラダイムシフトを迫られていたはずで、それがコロナのおかげで、あらゆる変化が急激になり、直面せざるを得なくなったということだと思ふのです。こんな時こそ「デザインの出番」です。デザインは「希望の光」ですから。

大阪デザインセンターに、そしてあらゆるデザイナーの皆様をお願いしたいです。皆さんは今まで以上に「希望の光」をもたらす存在でいてくださいと。かつて私たちがデザインで救われたように、デザインは希望の光となり、道標となり、心強い味方です。そのことに誇りを持って、デザイナーの皆様も大阪デザインセンターも、ものづくりをする会社や人々に光を当てて欲しいです。そして、私たちが自力で自分たちの未来を築いていけるお手伝いをお願いしたいです。

町工場である私たちがデザイナーの先生方に顧問をしていただいた時、大切にしていたことがあります。

私たちは「先生にお任せ」しませんでした。できる限り自分たちで発案し、設計し、作っていくように努めました。

「お任せ」では自力がつかないからです。そんな頑固な私たちが先生方はずっと温かく指導してくださいました。

おかげで前述のように数々の賞をいただける会社になり、未来を自力で開いていける会社となっていると思っています。

コロナ後、世界は経済が停滞していて、這い上がるのは容易ではないと思います。そこに物を作って生き延びるのは至難のことでしょう。今、この厳しい状況にあり、つくづく思うことがあります。持つべきは未来を見据えて、「底力を養う」大切さです。大阪デザインセンターも、デザイナーの皆さん方も、私達ものづくりの会社も、そして個人も、これからの時代は「底力」、つまり基本的に持っている「実力」そのもので勝負する時代になっていくでしょう。実力が問われる時代が来ると思います。

コロナのおかげで、私たちは「お上＝行政・政府」に頼るのではなく、自分たちの力で新しい時代に向かって新しい仕事を生み出していかなといけないことを学びました。大阪デザインセンターに望むのは デザイナーとのマッチングではありません。ものづくりの会社もデザイナーも、自力を磨き自力をさらに強くし、未来を作っていくための「場」を作るセンターであって欲しいです。デザイナーと企業をつなくマッチングなど要りません。自ら動いて自分たちでマッチングするためのプラットフォーム作りをして欲しいのです。マッチングの判断はデザインセンターの仕事ではないと思っているからです。でなければ、企業もデザイナーもいつまでも自立できなくなってしまう。

ものづくりの町工場をするものとしてお願いします。自力で仕事を生み出し、自力で自分を雇う会社を見つけられないデザイナーに、従業員が汗水垂らして作った貴重なお金を払うことはできません。これからのデザイナーは物を作るだけでなく、未来を作っていくって欲しい。また、私たちも「私たちと一緒に」「ものづくりを通して未来を作るデザイナー」を見つけていきたいと思っています。デザインセンターには、そうしたものづくりの会社やデザイナーが自立し、自力で仕事を生み出すお手伝いをして欲しいのです。

次に、実力をつけるための講座、自立のための講座をしてほしい。その講座には必ず振り返りの時間をたっぷりとして、質疑応答だけではなく「積極的に議論し合える場」を作って欲しいです。その「議論」が私たちが育てるからです。一方的にインプットするだけでは実力はつきません。議論をし、違う考えや感性を学び、自分を磨きながら 私達は成長をしていくものだと思います。更にもう一つお願いがあります。協力し合える企業や人と出会える場所を生み出してほしい。そこから先は、私たちが七転八倒しながら一歩ずつ進み、自分の力を養って行きますから。つまり、デザインセンターにはそのような「学ぶ場」「成長する仕組み」「出会うチャンス」作りをして欲しいのです。それも、生き生きと使える場所作りです。

デザイナーの皆さんにお願いします。デザイナーの皆さんも、私たちを探しにいらしてください。そのクリエイティビティを「もの」にではなく「新しい仕事を産む」と言うことに注いでください。そのことを熱く語って下さるなら、またそれぞれの会社の特徴を理解し、理念を理解し、共に新しい道を作っていく・・・そんな仕事をして下さるなら、一緒に仕事をしていきたいと思う企業は結構あるはずです。

私たちがこのような仕事をしていくとき、大阪もまた自立をし、自ら仕事を生み出す力強い存在に戻れると確信しています。かつての大阪がそうであったように。

「デザインは未来を照らす希望の光」

その言葉を大阪デザインセンターの60周年にあたり、感謝と共に捧げたいと思います。

